演劇・映画・旨い飯が人生の三箇条

みの～れ住民劇団 演劇ファミリーMyu

市川 紗久也（いちかわ さくや）さん

みの～れと共に生活するスタイル
Minole Life のすすめ No.190

みの～れの大きな木々の間から今年も賑やかなセミの声がたくさん聞こえてきます。アブラゼミの「ジリジリジリジリ・・」という鳴き声は、油で揚げ物をするときの音に似ているので油蝉と呼ばれるようになったとか。今回はみの～れ住民劇団 演劇ファミリーＭｙｕのメンバーで「ザック」の愛称で親しまれる、那珂市にお住まいの市川紗久也さんを取材します。

役者のほかに脚本も取組む

幼少期に英語のクラブに入り、外国人の先生と歌ったり踊ったりしているうちに、表現することの楽しさに気づいたという市川さん。高校の時にＥＳＳ（英語）部で英語ミュージカルを上演。セリフは二言三言のウェイター役で、初舞台を踏みました。

茨城大学に進学し、学生サークル「演劇集団 風ノ街」に入団。本格的に演劇を始めました。「自分を出すことだけで精一杯」で、声が小さいと言われ、腹式呼吸を覚えて鍛えたり、身長１８８㎝ある身体は舞台で武器になると言われ、活かし方を研究しました。

風ノ街の先輩でイチニノの代表を務める前島宏一郎さんと出会い、社会人の演劇に飛び込んでみたいと思ったという市川さん。大学1年の時に思い切って前島さんに連絡を取り、初めてみの～れの舞台に立ったのが5年前。「当時はまさか、その後みの～れとこんなに縁が深くなるとは思ってもいませんでした」と懐かしそうに話します。

大学４年の時にＭｙｕの演劇ワークショップを受け、その後入団。「Ｍｙｕは世代が幅広く、多様な価値観が集まる中で、対話しながらすり合わせていく運営方法がおもしろいなと思いました」。まちの未来を背負っていく子どもたちに大きな背中を見せたい、という市川さん。昨年10月に上演したミュージカル「黄色い袋と魔法のトンネル」では、大きな権力と仲間たちとの友情の間で苦しむケロ吉役を熱演。心の中で揺れ動くところが自分に合っていた役だった、と市川さん。毎回公演に来てくれる父から「お前が一生懸命になれる意味が分かった」と喜んでもらえたことが何より嬉しかったそう。「これからも舞台に立ち、何を考えているか分からない役を演じたり、自分の思いが言葉にならない役を演じたりして、将来はＭｙｕの看板役者になりたいです」と夢を話してくれました。

役者だけでなく、現在は脚本にも取り組んでいる市川さん。来年2月に上演する、Ｍｙｕの大人たちで創る演劇作品の脚本チームに志願したそう。「7人でいま脚本を創っているところです。一進一退ですが、オリジナルを生み出せるＭｙｕという場が本当にありがたいです」。

元来恥ずかしがり屋で、演劇・映画・旨い飯を人生三箇条として生きているという市川さん。次回の公演が楽しみですね。（藤田佐知子）